

岡崎市美術博物館ニュース 〈アルカディア〉
OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

93
WINTER
2023

ARCADIA



花と鳥のかたち

特任館長 榊原悟

と云えば、もう一人、若沖を遡ること百五十年余り、同じく常州草虫画を土台に、自己の独創的絵画を描いた絵師がいたはずだ。『雑画帖』の絵師土佐光則である。しかし、その光則も含め土佐派に対しては、やまと絵の伝統を継承、墨守した流派、従来の日本美術史の記述では、そうした評価が一般的で、「独創」の語から最も遠い、とみられてきたはずである。そんな保守の牙城土佐派の絵師光則の仕事に独創的とは、と訝る読者も多いに違いない。

だが、土佐派の伝統たる細画の技法を、さらに洗練・先鋭化させた超細密画法と、虫の絵なればこそその極小画面とを融合させ、全く前例のない虫の世界を描き尽くした光則『雑画帖』の虫の絵。その先駆性と革新性、完成度の高さは比類ない。真に独創的と称するに足るのは、こうした作品を指すのではなかったか。しかも、制作年は、若沖の「池辺群虫図」を大幅に遡る。若沖！若沖！！と、若沖なければ日も夜も開けぬ昨今、光則を忘れてはいませんか、と云う次第。

となると、光則の虫を見る先進的な眼が、どうして養われたのか。

とり敢えずは『雑画帖』の制作に至る経緯が知りたいのだが、紀州徳川家伝来というだけで、注文主等については不明。そうした中であって、光則の虫たちの図像的淵源が、バージニア本に示された虫のかたちにあるのが明らかとなった以上、バージニア本ないし、その類作との係わりが推定される堺と堺の町衆文化を、その制作の背景に置いてみるのも無理はない、と思うのだが、いずれにせよ、これが粉本制作であることに変わりない。その作を創造的と評価する。それを導いたのが、かたちの記憶と継承すなわち粉本制作そのものだ、と云うのも皮肉だが、それこそ粉本の功罪——こうした場合、しばしば口を衝いて出る言葉だが、本当にそんな文言のみで片付

けてよいのか。改めて粉本と粉本制作について考えてみるべきだと痛感する。それは当時の人たちの絵画観や鑑賞眼とも係わる大きな問題となるはずで、後に触れる機会もあるだろう。

以上、虫のいる花鳥画を取上げてみた。

それを見つめる醸成した眼がない限り、絵に描かれるはずもない——この命題を検証するために虫は格好のモチーフだと考えたからである。とは云え、そもそも虫のいる花鳥画の遺例は少ない。取上げた作もわずかだが、しかし、今回の検証では、逆にその事実自体が好都合であったと云うべきか。その結果をまとめておくと、次のようになるだろう。

- ・ 虫のいる花鳥画は、本間屏風の大大画面もないわけではないのだが、ほとんどは小画面であること
- ・ その虫は、例外もないわけではないのだが、わたしたちの先祖がほとんど眼を向けることのない、いわば「漢」に係わるモチーフであること
- ・ また虫と共に描かれた草花も「漢」にまつわる植物であること
- ・ その虫の姿は、自然界に棲息するそれで、喰うか喰われるか、生々しい一瞬の光景を捉えたものも少なくないこと
- ・ そうした姿もまた、わたしたちの先祖の伝統的な眼が捉え切れなかったもので、いわばこれもまた「漢」に係わること
- ・ その「漢」にまつわる草花と虫とを描くについては、宋・明の花鳥画、なかんずく常州草虫画の影響が大きいこと
- ・ なかでもバージニア州立美術館本（ないしは上覧本、或いはそれらの原図となった舶載本）こそは、そうした虫や鳥、小動物の図像の淵源となったこと

思い出して貰いたいのは、白鶴美術館本をはじめ元信・狩野派の「四季花鳥図屏風」のことである。そこには、牡丹に芙蓉、萱草、薔薇に梅、孔雀に錦鶏鳥、鳳凰など「漢」に由来する花と鳥が、「和」に係わるそれに伍し、と云うよりそれ以上に大きく描かれていたはずだ。そこから元信の「漢而兼倭」とは、単に元信の画風に対する評語と云うに留まらず、花鳥画のモチーフ選択における特徴を指す語でもあったことと、そうした「漢」のモチーフをふんだんに取り入れたその花鳥図は、当時にあつては最新の、眼を驚かすに足る作であったこととを、

改めて強調しておきたい。それと云うのも、「漢」に係わる、そうした花や鳥にもすっかり馴染んでしまった現在のわたしたちにとっては、それらがもたらす目新しさも、おそらく遠い過去のものとなってしまったからである。

そしていままた「漢」に係わる草花である。近世の花鳥画に占める「漢」の草花の存在の大きさを知るべきだろう。むろん、そうである限りは、これを描いた絵師にも、また描かせた注文主＝受容者にも、そうした植物を見つめ、愛でる眼と心があったことに他なるまい。その眼を育てたものもまた当時舶載された宋・元・明代の花鳥画であったと云うのだろうか、本当にそれだけだろうか。

ことは眼の問題である。そうであれば、まずは見なければなるまい。見る対象がたとえ「漢」に係わる植物であろうと、虫であろうと、その点は変わるまい。

そう云えば、本稿のそもそもの初めで、あの蕪村一代の佳吟「菜の花や」の一句を上げ、その辺りの事情を述べたはずだ。蕪村がこの名句を得るについては、それを吟じた際、眼前に菜の花畑が広がっていたか否か、実際には広がっていることなどなくていいのだが、これ以前の蕪村に、あたり一面黄色に染めた菜の花畑を眼にする機会があったことだけは疑いあるまい。視覚的菜の花原体験である。

重要なのはここからで、では、そうした視覚体験を蕪村に可能にさせたのは、一体何であったのか、と云えば、もう、お分かりだろう。そう、菜の花をめぐる栽培事情が、それを可能にさせたのである。なんとも呆気ない答えで恐縮だが、しかし、菜種油を採るため、当時、幾内は云うに及ばず、全国的に菜の花の栽培が盛んで、時節ともなれば、一面、黄色に染まったと云うではないか。その情景を眺める。そうした原体験があったればこそ、初めてあの佳吟の構想と修辞＝趣向が生まれた。

となれば、俳諧と絵画との違いこそあれ、いや、絵画が視覚に直結するだけに、先に「漢」に係わるとした草花を絵師が描くについても、そのいくつかは、草花自体を眼にする機会があったのではなかったか。それを可能にさせたものは、と云えば、言うまでもあるまい、蕪村の「菜の花」が栽培されたものであったのと同様、植栽されたそれである。

そこで時代をもう一度、室町時代に戻したい。言うまでもない、狩野元信が「四季花鳥図屏風」を描いた時代である。その元信「四季花鳥図」の新しさが、「漢」の植物を積極的に取上げた眼にあることは述べたではないか。となれば、その「漢」の植物の当時の植栽事情を探ることは、元信ははじめ後の「四季花鳥図」を考える上で必須の前提であるはずだ。



図1

館長に着任して以来、続けてきた「眼の極楽」と題した連載も回を重ねて四十回余りに及ぶ。その間、多くを日本絵画における花と鳥のモチーフについての分析に費したが、今回をもって一応の区切りとしたい。未完のまま終了するのは、何ともこころ苦しい限りなのだが、ご容赦をお願いすると共に、お付き合ひ下さった読者諸賢に心よりお礼申し上げます。



図2

至った。休載を決意した所以である。いずれ論文のかたちでお目に掛けたい。

今後、このスペースは、当館の学芸員、職員中心に発表の場となる。その時どきに考えている問題を鋭利な視点から論じてくれるはずである。市民各位への情報発信の場も必要だろう。そのために、見開き二ページは、使い勝手もよい。引き続き、ご愛読をお願いする。

なお、今回の掲載図版(図1)は干支に因んで兎の絵を掲げた。わたしの愛蔵する一図だ。筆者山卜良次は、狩野山楽・山雪周辺の絵師と考えられるものの、その伝歴はなお不明。奈良方面に作品が遺されていることから、奈良の地にゆかりがあるとする向きもある。そう思ってみれば、この兎、春日大社の縁起を描いた『春日権現霊驗記絵巻』(図2 宮内庁三の丸尚蔵館蔵)の巻五第二段、春日権現のご加護で繁栄した藤原俊盛の邸の広大な庭で草を喰む兎に近似する。かつて奈良にあったこの縁起絵を山卜も披見する機会があったのでは、と述べると、

—またいつものかたちの一致か、まったく雀、百まで踊りを……とは、よう言ったものだ、と笑われそうなので、これ以上の穿鑿はご法度。いまは、この可愛らしい兎にあやかり、今年を跳躍飛躍の歳にしたい。本年も何卒宜しくお願い申し上げます。

NHK大河ドラマ特別展開催決定！

湯谷 翔悟

【告知】NHK大河ドラマ特別展「どうする家康」、令和五年四月十五日から、三井記念美術館でオープンです！

ハイ、まさかの他館の宣伝からはじめてみました。NHK大河ドラマ特別展「どうする家康」は下記のとおり東京・岡崎・静岡の三館で巡回します。巡回しますが、巡回展じゃないんです。

：自分で言っていて訳分からなくなりましたが、要は巡回展だけど各館でテイストが全く違うのです。通常の大河ドラマ展、いや大河ドラマ展に限らず多くの巡回展では、同じ作品や資料が展示されます。作品保護のため展示替えされる際も、似た資料に替えられる場合が多いです。



重要文化財 徳川家康坐像（知恩院蔵）

しかし今回の大河ドラマ展、構成は同じなのですが、三館それぞれに特色があります。それだけに、三井記念美術館さんだけで出品されるものもたくさんありますし、当館・静岡市美術館さんでも同様です。そのため、巡回スタートの告知が大事なのです。

このような特殊な事情となった経緯を話すと長くなるのですが、少しだけ裏話をすると、本展は「家康の生涯をたどる」というテーマで資料選定を始めました。しかし、家康のことを少しでも知っている諸賢ならば、この危うさに気付くでしょう。桶狭間・三方ヶ原・長篠・伊賀越え・小牧長久手・江戸入り・関ヶ原・江戸幕府・東照大権現。超有名どころを挙げるだけでもキリがありません。それに関する研究蓄積は分厚く、資料は際限ない：つまり、そういうことです笑

なので、もしお時間・フトコロに余裕がございましたら、ぜひ三館巡ってください。つまり「お客様に巡回していただく展覧会」になるということか：お手数をおかけいたします。

さて、当館のテイストですが、家康の生涯を辿る王道の展示（自称）となっています。目玉はたくさんあります。ゲームでも人気のあの刀剣とか、信長一周忌に作られた等身大の木像とか、四天王の甲冑とか：。全容はまだ内緒ですが、ここではひとつだけ紹介します。知恩院ご所蔵の《重要文化財 徳川家康坐像》です。こちらの御像、岡崎のみでの展示です。

江戸時代初期、仏師康猶の作で、家康の本当の顔に近いといわれています。皆さまが思い浮かぶ家康の顔は、孫の家光が夢に見た、神格化されたものです。その顔と比較すると、この知恩院の家康像は、「たぬき親父」というイメージとは全く異なる印象を与えてくれると思います。また東岡崎駅の銅像は、この像の顔をモデルに制作されました。そうした岡崎ともゆかりの深い像であることから、今回の展示では入ってすぐの所に象徴的に展示する予定です。

こちらの御像は、知恩院の御影堂に祀られ、毎月十七日の家康月命日に御開扉されています。御像は信仰の対象として本来の場で拝むのが一番ですが、展示室内という普段とは違う空間で向かい合う体験も、貴重な機会です。家康の生涯にまつわる優品が岡崎に集う、またとない機会です。大河ドラマ聖地巡礼と併せて、是非来館ご計画ください。

NHK大河ドラマ特別展「どうする家康」開催決定！

この展覧会は、三館でテイストを変えて巡回します

【東京展】三井記念美術館
令和5年4月15日(土)～6月11日(日)
数々の屏風と美術品で迎える
家康の戦国泰平絵巻！

【岡崎展】岡崎市美術館
令和5年7月1日(土)～8月20日(日)
家康ゆかりの優品を
彼の生涯に紐づけて紹介！

【静岡展】静岡市美術館
令和5年11月3日(金・祝)～12月13日(水)
御府から駿府に集った刀工まで
家康ゆかりの名刀クロニクル！

収蔵品紹介
恩地孝四郎 《東京回顧図会

二重橋》

酒井 明日香



恩地孝四郎《東京回顧図会 二重橋》1945年 岡崎市美術博物館蔵

画面の中央を、橋脚の二連アーチが印象的な石橋が横切っています。逆光のためか黒色で描かれた、前景の枝垂柳や石垣と、石橋や背景の空と緑の明るさが対照的です。輪郭線がなく、版木を彫った跡がわかる木版画の表現が相まって、本作品はどこか素朴で親しみやすさを感じさせます。題名にある二重橋は、皇居にかかる橋のひとつです。都心にありながら水と緑の豊かな風景が、きつと当時から好まれていたのでしょうか。

本作品を手がけた恩地孝四郎は、装丁家であるとともに、日本でいち早く抽象版画に取り組んだ作家です。恩地は一九一二年に東京美術学校予備科西洋画科志望に入学しますが、竹久夢二に惹かれて「夢二学校」に出入りします。夢二の元で抒情や作家の内面の表現に触れた恩地は、一九一四年にカンディンスキーをはじめとしたドイツ表現主義の版画作品を見て深く共鳴し、版画家として歩みはじめました。同年には田中恭吉、藤森静雄とともに同人誌『月映』を発行、翌一九一五年には日本で最初の抽象版画作品と言われる「抒情」シリーズを発表しました。そして一九一九年、山本鼎らが旗揚げした日本創作版画協会の第一回展に出品するなど、大正から昭和初期にかけて、具象・抽象問わず様々な版画作品を精力的に制作しました。その後、画業の晩年となる戦後には、一転して抽象版画に傾倒し、当時日本に駐留していたアメリカ人に高く評価されました。

本作品は、終戦後間もない一九四五年に出版された、『東京回顧図会』（富岳出版社刊行）というシリーズのうちの一作です。同シリーズは戦災復興に向けて、空襲で被害を受ける

前のかつての東京を懐かしみ、複数の作家が作品を持ち寄った版画集です。恩地孝四郎のほか、平塚運一・山口源・川上澄生・前川千帆・関野準一郎・畦地梅太郎・斎藤清・前田政雄ら日本版画協会の同人がベテランも若手も名を連ね、十五点の作品が収められました。

『東京回顧図会』に持ち寄せられた全十五点のうち、八点は過去に発表済の作品です。恩地の『二重橋』も、過去の作品を再度摺ったもので、元は一九二九年に発表・頒布された『新東京百景 二重橋早春』です。両者を比較すると、サインや水面に映る二重橋などが、作家が見た二重橋の風景をよく伝えていますが、『新東京百景』（創作版画倶楽部発行）は、一九二九年から一九三二年にかけて頒布された一〇〇点組の版画集で、恩地をはじめ様々な版画家が作品を寄せています。そして『新東京百景』では、関東大震災からの復興が始まった東京の姿が、あたたかみをもって描かれました。皮肉にも、震災からおよそ二十一年で東京が再び灰燼に帰したことが、もう一度『二重橋早春』を摺る機会となりました。

本作品は現在の私たちにとつては、戦前のレトロな東京の姿を伝えてくれる作品です。しかし震災と戦災を体験した作家にとつては、慣れ親しんだ風景がなくなってしまうことに対する、もつと切実な思いが込められていたことでしょう。今年二〇二三年は、関東大震災の発生から百年を迎えます。震災復興に心を砕いた作家たちに思いを馳せるとともに、改めて日々の備えを忘れないようにしたいものです。

女の子の健やかな成長と幸せを祈って飾る雛人形。桃の節句、雛まつりが今のような行事になつていくのは江戸時代初期の頃からで、雛人形を飾ることが流行ったのは江戸時代後期からのことと考えられています。

今回紹介するのは、御殿飾りと呼ばれる雛人形で、大正八年（一九一九）京都生まれの女性のために昭和六年（一九三一）に新調、揃えられたものです。

御殿飾り雛人形とは、御所の紫宸殿を模した御殿を中心にして、内裏雛や三人官女、五人囃子、隨身（左大臣・右大臣）などの人形を飾った雛飾りです。江戸時代にはあつた形式で御殿を「雛の館」とも呼び、京都や大阪などの上方を中心に人気を集めました。もともと御殿のなかに人形を飾るものであり、当



写真1

初は御殿が小形であつたため、それに応じて人形も小ぶりなものでした。それが時代を追うごとに御殿も人形も大きくなつていきました。現代のドールハウスのような雰囲気を感じられる雛人形です。

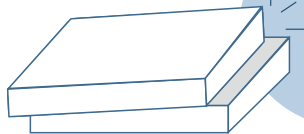
それでは、雛人形をみてみましょう【写真1】。

御所風の御殿は幅一二六cm、奥行五七cm、高さ八八cmほどある大形な館です。紫宸殿（向かって左の館）と侍所の二棟からなり、檜皮葺に素木の御殿本来の姿を模した古風な趣のある京風の御殿飾りです。人形は一人五人揃いで、紫宸殿内に内裏雛と三人官女、侍所には五人囃子を飾り【写真2・3】、紫宸殿階段下両脇に隨身を配し、御殿の庭端に仕丁がいます【写真4】。そして、左近の桜と右近の橘、雪

暮らしの道具箱 V

母から娘へ受け継がれた御殿飾り雛人形

伊藤 久美子



洞一對を置き、二段目と三段目に雛道具を飾ります。御殿の圧倒的な存在感と豪華さ、そして繊細なつくりも楽しむことができます。

ここで、三人の仕丁にちよつと注目して下さい。仕丁とは公家に仕える雑役夫で、位のない官人の装束である水干を着ています。一般的な雛人形では、沓を持つた泣き上戸を中心にして笑う上戸が向かって右、怒り上戸が向かって左に一列に並んでいます。この雛人形では一日の務めを滞りなく終えたのか、三人で酒を酌み交わしながら和気あいあいと談笑しているユーモラスな情景がみ取れます。

御殿飾りは御所を模した形式であることや、屏風を背に飾る段飾りの雛人形にくらべて簡素で古風な趣であつたためか、武家社会の江戸ではあまり好まれず流行しませんでした。この地方では昭和になつて定着したようです。御殿飾りは戦争を機に一時姿を消しますが、戦後復興し始めた昭和中期頃に復活し、昭和三〇年代後半になると姿を消していきます。

この御殿飾り雛人形は母から娘へと受け継がれて、平成一〇年代後半まで娘夫婦の住むマンションで毎年飾られ大切にされてきたお雛さまです。



写真4



写真2



写真3

第一期改修工事

休館期間：令和四年八月二十九日―令和五年六月

野澤 太雅

暦もいつの間にか十二月。一年が過ぎるのも早いですね、という定例のあ
いさつの季節です。そんな中、改修工事も館内各所で解体・撤去が着々と進
んでいます。

機械室ではスクリューヒートポンプ・空調機などがごっそりと無くなり、
がらんとした空間ができています。そこには機械類を支えていた平たいコン
クリートの架台が、新しい機器の搬入・据え付けを待っています。架台から
視線を上に向けると、空調機と切り離されたダクトが大きく口を開けており、
今にも何かが顔を出してきそうです。

通路天井などでは天井ボードが剥がされ、縦横に走っていた配管が撤去さ
れています。配管を支えていた沢山の吊りボルトが、コンクリートの天井か
ら伸びています。先端にリング状の固定金具が保温材とともに残っているも
のがあります。その姿はまるで、ドーナツに長い串をぶっさして吊り下げて
いるよう。…何を言っているか訳が分からないですね。でもそんな不思議な
光景です。

展示室内はダウンライトなどの照明器具がすべて取り外され、器具があっ
た場所にはぽっかりと丸い穴。ここからはケーブルが蛇のようによろによ
ろと顔を出しています。

エレベーターの解体はこれから。仮囲いが設置されて、乗降口が見えなく
なっています。

さて、解体・撤去・搬出が済めば、新設機器の搬入・設置です。一部の配
管などは、すでに設置作業が進んでいます。また、屋上の機器を設置する時
には大型のクレーンで吊り上げるとも聞いています。巨大な重機の出番、ワ
タワクしませんか？



EXHIBITION REVIEW

ゲルハルト・リヒター展

二〇二二年十月十五日―二〇二三年一月二十九日

豊田市美術館

田中 裕紀乃

当館は休館中でも、皆様には展覧
会を楽しんでいただきたい！そこ
で今回はタイトルにある展覧会を皆
様にご紹介したいと思います。

しかし、展示空間に足を踏み入れ
ると、真正面にある《ビルケナウ》
が目飛び込んできます。そして本
作に向かつて左側の壁には、リヒター
が本作を制作する契機となった四枚
の写実があります。これはアウシュ
ヴィッツ第二強制収容所（ビルケナ
ウ）のなかで一九四四年に隠し撮り
された光景です。その四枚の写実の
反対側の壁には《グレイの鏡》
（二〇一九）があります。正面に見え
る本作と向かい合って展示されてい
るのはリヒターが同時期に制作した
写実バージョンの《ビルケナウ》。こ
の空間は、《ビルケナウ》を鑑賞する
ために設えられた一種のインスタ
レーションとして存在しています。

《ビルケナウ》という作品の制作に
あたって、リヒターはまず「フォト・
ペインティング」の要領でキャンバ
スに四枚の写実を投影し、具象的な
描写をしています。そしてその上に
絵具を上描きすることで、《アブスト
ラクト・ペインティング》へと昇華
させています。最終的に、タイトル
がなければホロコーストと結び付け
られないほどに抽象化され、具象的
なモチーフは下層にしまい込まれま
す。そして同時期にリヒターは、本
作を同じサイズの写実で複製してい
ます。この複製という行為は、ビル
ケナウで行われたような暴力の反復

可能性を示唆しているようにも思え
ます。

鑑賞者は、この《ビルケナウ》と
いう作品の傍らに四枚の写実が併置
されていることで、本作とホロコー
ストを結び付け、想起します。す
ると抽象的なこの画面はたちまち大量
殺戮と結びつき、例えば赤の絵具は
犠牲者たちの血を思わせるかもしれ
ません。

《グレイの鏡》と組み合わせられると
どのような現象が起こるのでしょ
うか。《ビルケナウ》に視線を向ける自
分自身が、鏡越しに視界に入ります。
私にとって「鏡を見る」という行為
は極めて個人的な行為であり、公共
空間で「鏡を見る」ことに抵抗を感
じてしまいます。鏡を通じて私が感
じた不快感もまた、《ビルケナウ》を
考えるのに必要な要素の一つなの
かもしれません。

この記事が出るころには閉幕ギリ
ギリかもしれないですが、皆さんもイ
メージが乱反射し、反復する展示空
間を是非体験しに行ってみてくださ
い。



ゲルハルト・リヒター展の風景写真。
展示作品は、《ビルケナウ》2014年、
ゲルハルト・リヒター財団
©GerhardRichter2022(07032022)

SHOP INFORMATION



MUSEUM SHOP YAGURA 岡崎市美術館

1935年に創業した瀬尾製作所のブランド「sotto」

“くらしに寄り添う祈りのかたち”をテーマに、現代の暮らしにそっと溶け込む仏具を製作しています。故人を偲び、ご先祖を敬う。私たち日本人が古来から大切にしてきた「祈り」の心は、時代を経ても、脈々と受け継がれてきました。しかし、時代と共にその「祈り」を捧げる場は変わり、よりシンプルでコンパクトなものが求められるようになりました。家族が集うリビングスペース、あるいは、ベッドルームの傍のチェストにしつらえても。

高岡銅器の重厚なつくり、透き通った音色のおりんは、すべて日本の手仕事によるもの。ご先祖や家族のほか、家族の一員として接してきたペットの供養にも、祈りの心を大切に、手を合わせるささやかな“場”として、日々の生活にそっと寄り添ってくれます。

MUSEUMSHOP YAGURAは休館中のため、安城市にある姉妹店インテリアショップ soup.Life Storeにてお買い求めいただけます。

休館中のお問合せは soup.Life Store (0566-93-4131) までお気軽にお問合せください。

営業時間 休館中のためCLOSED
H P <https://www.b-soup.com>



YOUR TABLE

岡崎市美術館設備改修工事に伴い、YOUR TABLEは令和5年3月15日まで休業予定です。
※3月16日から営業再開予定（日程は前後する可能性があります）

HP: <https://your-table.owst.jp>

YOUSED TO BE



昭和初期の修学旅行
世代を超えて学校生活のイベントとして共有される修学旅行。今回は昭和初期の本市小学校の様子をご紹介します。
当時の葉によると、岡崎小、梅園小、美合小、三島小と男川小の五つの学校による混成により、三つの日程に分かれていました。お小遣いは一円五〇銭まで、仁丹を持っていくことが奨められています。集合時間は早朝。昭和十三年の日程によれば、岡崎駅の出発時間はなんと午前四時五十分！集合時間はさらに早い午前四時で示されているのですから、お家の人も大変です。
気になる行き先は京都、奈良、大阪、神戸など。これを二泊三日で巡るのですから強行軍です。旅程には明治天皇家がある桃山での参拝が組み込まれており、時代の空気を感ぜさせます。ちなみに葉には途中通過する駅と付近の名勝、さらには、信長の築いた安土城（右）…など窓から見える向きまで示されています。車窓も含めての旅情、新幹線の移動に慣れきった我々が忘れがちなものかもしれません。
やがて戦争が始まると修学旅行は全国的に中止になってしまいました。昨今はコロナで修学旅行が中止になってしまった例もあります。集団旅行が楽しめる時代が戻ってきてほしいものです。
(米田)

表紙画像：太刀 銘 信房作（山形・致道博物館蔵）



岡崎市美術館

設備改修工事のため、岡崎市美術館は令和5年6月まで休館します

H P <https://www.city.okazaki.lg.jp/museum>

ARCADIA OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

【岡崎市美術館ニュース／アルカディア】 第93号 2023年1月発行
編集・発行 岡崎市美術館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町畔1番地 岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000(代表)